

# 崔載瑞の批評における 「個性滅却」の思想と皇道主義

郭旻錫

(京都大学大学院)

はじめに

## (1) 崔載瑞という人物

戦前朝鮮を代表する文芸批評家の一人である崔載瑞(1908～1964)は、京城帝国大学英文科を優秀な成績で卒業し、1930年代の初頭から、イギリスの主知主義文学論を紹介する文章を発表しながら批評活動を始めた。彼はイギリス主知主義文学論に完全に賛同してはいなかったものの、それから強い影響を受けながら彼独自の批評思想を構築していった。その結実が朝鮮文学最初の評論集『文学と知性』(1938)である。批評実践においては、朝鮮の文学作品を取り上げた最初の本格的な批評とされる「リアリズムの拡大と深化」(1936)が有名である。崔載瑞は当評論で、当時社会主義文芸批評家の専有物と思われたリアリズムの概念を持ってきて、芸術の純粋性を目指す作品においてその拡大と深化を読み取ることによって、いわゆるリアリズム論争を引き起こすなど、朝鮮の批評界において中心的な役割を果たした。

1939年からは『人文評論』の編集者として活発な批評活動を展開し、『人文評論』が廃刊され1941年誕生した『国民文学』を主宰してからは、本格的に対日協力的な文学活動を展開した。『人文評論』が当時の左右翼の論客を総動員した総合的文芸雑誌という性格を持つ半面、『国民文学』は総督府の政策に寄り添う形での文学の在り方を模索しようとするものであった。1943年からは自らも創作を始め、「報道演習班」(1943)、「非時の花」(1944)、「民族の結婚」(1945)など、「内鮮一体」を志向した「皇道文学」の道を進んだ。解放後には、政治的な空間から遠ざかり、英文学

の研究に邁進した。

本稿では、解放以前の崔載瑞の評論活動を対象にして、主知主義文学論から皇道主義までつながる彼の内在的な論理を、「個性滅却」という概念を軸にして考察することを試みる。

## (2) 崔載瑞の「転向」をめぐる

個人の感情を文芸創作の最も重要な要素とするロマン主義を批判し、冷徹な知性の重要性を説いた1930年代の主知主義者崔載瑞が、1940年代に至って天皇のために命も捧げようとする最も熱烈な皇道主義文学者に変貌したのは、彼の文学を統一的に理解しようとした多くの研究者を当惑させた。

崔載瑞に対する研究は、まず1930年代の評論に表れた主知主義的な傾向を論じる主に90年代に行われた一連の研究(ソジュンソブ1993、グォンイルギョン1996、ジンジョンソク1997)、また「親日」の行跡を研究対象から排除する従来の慣行から脱皮して『国民文学』を中心とした1940年代の崔載瑞の批評活動を包括的に論じた一連の研究(尹大石2006、イウォンドン2010、イヘジン2010、ゾンスルヨン2010)、また1930年代の主知主義的な立場と1940年代の国民文学の立場をその関係性において考察した研究(ゴボンジュン2008、イサンオク2010、イマンヨン2012、イヘジン2015)の三つの類型に大別してみることができる。

この中で三つ目の類型、つまり1930年代と1940年代の崔載瑞の批評を、その関係性において考察する研究の動向は、1930年代の主知主義文学論という外来思潮の受容の段階と1940年代の『国民

文学』における対日協力的な批評活動を、別個のものとして、お互い断絶したものとして扱ってきた従来の研究態度に対する不満から台頭した観点であると思われる。そのために、『国民文学』の以前と以後を一つの連続的な実体として説明しようとする傾向が著しい。崔載瑞の批評的合理主義精神に注目し、「新体制時期の『国民文学』は、彼の批評論全体の脈絡からみて完全な断絶を意味する」（イヘジン 2015: 425）という数少ない例外を除けば、そのほとんどが崔載瑞の批評活動を連続的なものとして説明しようとするのである。例えばゴボンジュン（2008: 245）は、崔載瑞の批評が単純に外来思潮の「輸入」や、「親日」という価値評価に還元されない理論体系を備えていたと述べる。またイサンオク（2010: 373）は、主知主義文学論から得た「秩序の文学」の思想が親日ファシズムにつながる内的必然性が存在することを指摘し、「崔載瑞の親日ファシズムはどこまでも『秩序の文学観』という自らの文学的理想を投影する現実を発見したことに過ぎない。これは世界的な転換の中での選択の問題であり、知性の破綻の結果ではない」という。また「普遍への夢を捨てられなかった彼が苦心の末に到達した道は、日本を中心とした普遍秩序の構築、即ち大東亜結成という普遍化の道であった」という、「既往の普遍化論理の極端化」として崔載瑞の転向を説明するのも、その一例である（イマンヨン 2012: 470）。

### (3) ポストコロニアリズムの理論的受容

そもそも、植民地末期に行われたいわゆる「親日文学」を積極的に研究の対象として取り入れ、対日協力の前後を連続しているものとして捉えようとする研究の動向は、林鍾国の『親日文学論』（1966）に代表される民族主義的な文学史叙述に対する懐疑的な視線からもたらされたものである。韓国の近代文学史は植民地末期を「暗黒期」という表現で規定してきたが、鄭鍾賢はむしろ「暗黒期」という規定が何を隠蔽しようとしているのかを問うべきであると主張する。「『暗黒期』という命名は時流に能動的で力動的に応えた自らの行為を『処世』として合理化しようとする植民地知識人の記憶の一樣相であるに過ぎない」のであり、

「それにもかかわらずそのような命名が公認され得たのは、『民族文学』の連続性と同質性に対する集団的合意が存在したからである」（鄭鍾賢 2011: 17）。

民族主義的な文学史叙述に対する批判の方向性は多様であるが、例えば金在湧（2004: 37-46）は、民族主義的な親日文学批判における強制論は外在的な批判に過ぎないといい、対日協力の自発性の内面的な論理を探求することを提案し、また金哲（2005: 17-29）は、近代国民国家批判の観点から、親日文学論と民族主義文学論の間の距離を無化しようとした。また尹大石（2006: 15-17）は、「親日文学」が主体的な条件を没却した盲目的な文学だとする林鍾国の規定を批判し、むしろ朝鮮民族の言説が表面化した時期として植民地末期という時代を見直そうとする。

以上のような認識の変化は、民族主義的な文学理解を批判するための理論的武器として、ポストモダニズムやポストコロニアリズムの理論的受容によって可能になったといえる。『国民文学』前後の連続性という観点から崔載瑞の批評を理解しようとする傾向も、協力と抵抗の二分法から脱皮して、対日協力の自発性をより客観的に理解しようとするポストコロニアリズムの理論的受容の流れの中で位置づけることができる。

しかし、崔載瑞の批評を連続的な実体として捉えようとした既存の研究は、ポストコロニアリズムへの理論的傾斜のため、崔載瑞の批評の一貫性を解明することにおいて、図式的な理論的枠組みに過度に頼っているようにみえる。崔載瑞の批評の連続的な実体を解明しようとする先行研究の多くは、普遍的知性への信頼を強く持っていた崔載瑞が、パリ陥落（1940年6月）から西歐的価値という普遍的理念の没落を読み取り、普遍への志向性を、新しい普遍を標榜する帝国日本の大東亜の理念に移行していったという認識を共有する。

ゴボンジュンによると、崔載瑞が「執拗に掘り下げた主知主義文学は、現代の混沌を克服するための努力の一つ」であったのであり、「この時『普遍』の範疇をどう設定するのが問題になるが、崔載瑞の初期批評はそれを『世界』の水準で思惟したが、1937年以後急速に『日本』の方に傾い

ていく。そしてこの思想的变化を可能にしたのが即ち内鮮一体である」(ゴボンジュン 2008: 246) という。このような診断の下に、「『国民文学』は、日本帝国主義の植民地支配欲望と、〈朝鮮=日本〉という等式の内面化を根拠にして、自らを世界史の普遍の位置に高めようとする植民地知識人の欲望の共謀関係という性格を持つ」(ゴボンジュン 2008: 262) と指摘する。また、その欲望が徹底的に「誤認の構造」によって可能であったという、ポストコロニアリズム理論の援用による図式的な批判を繰り返している。イサンオク (2010: 355) による、「[崔載瑞の] 普遍的な思考は、延いては植民地末期日本の東洋主義ではなく国家主義を支持するようになる理由でもある。彼は西欧と対立する日本ではなく、西欧的普遍を代替する日本の『普遍』を支持したのである」という指摘も、「普遍の移転」という同様の枠組みを共有している。「『パリ陥落』は普遍性の標本といえる西欧の没落を確認する一大事件であったため、崔載瑞はコスモポリタンの理念を強調した既存の批評的論理を修正するしかなかった。結局彼は西欧を代替し得る普遍性の表象を日本に設定するに至る」とするイマンヨン (2012: 446) の論理も何ら新しいこともなく、ここでポストコロニアリズムの理論的枠組みが如何に強固であるかを確認することができる。

#### (4) 本稿の射程

「普遍の移転」という論理的媒介は、植民地と帝国の政治的力学関係を説明する一般的な枠組みとしては有効であるかもしれない。KAPF (朝鮮プロレタリア芸術家同盟) の解散 (1935 年) による「進歩的価値の崩壊」(車承棋 2009: 78-84) は、批評の確固たる基準の喪失をもたらし、文学創作における価値の真空状態を招いた。そのとき「内鮮一体論」は、日中戦争以後の植民地知識人の核心的な転向の論理であったのである<sup>(1)</sup>。

しかし「普遍の移転」という枠組みで崔載瑞の批評の連続性を解明しようとするのは、以下の二つの決定的な問題点がある。①それは崔載瑞の初期主知主義批評の思想的な核心を捉えていない。またこれに関して、崔載瑞は一度も西欧的価値の

普遍性を心から信じたことはなかったことが指摘されなければならない。②たとえ崔載瑞の主知主義文学論が普遍や秩序への志向という一側面をもっていても、そのことで彼が『国民文学』以後天皇のためには命も捧げるような熱烈な皇道主義者に変貌したことを説明することはできない。彼は西欧の普遍的価値のために命を捧げるようなことを主張したりはしなかったのである。以上の二点が解明されない限り、崔載瑞の批評の連続と、その連続の内的論理に関わる皇道主義者崔載瑞の実存的な問題は掴み切れないはずである。

以下ではまず 1930 年代崔載瑞の初期批評の思想的な核心が何であったかを解明する (第 1 節)。そうすることによって、崔載瑞の「秩序の文学観」が「個性滅却」の思想と不可分の関係にあるということが明らかになるだろう。続いて崔載瑞が熱烈な皇道主義者に変貌したのは、彼の思想の核心である「個性滅却」の内的論理の帰結であったことを論証する (第 2 節)。

### 1. 崔載瑞の初期批評における「秩序の文学観」と「個性滅却」の思想

#### (1) 崔載瑞における「秩序の文学観」

崔載瑞が朝鮮の評壇に存在感を示したのは、「現代主知主義文学理論」(1934.8) とその続編「批評と科学—現代主知主義文学理論続編」(1934.8, 9) を発表してからである。そこで彼は、ヒューム (T. E. Hulme)、エリオット (T. S. Eliot)、リード (H. Read)、リチャーズ (I. A. Richards) など英米の主知主義文学論を通じて自らの批評的態度を確立していく。彼は受動的に外来の文芸思潮を受容していたのではない。むしろ、普遍的価値の喪失という自らの時代診断に基づいて、その問題状況を解決するために、主知主義文学論の有効性を一定部分認めていたという方がより正確である。崔載瑞は主知主義文学論を全面的に受け入れていたのではなく、時代を観察するための道具として、それを便宜的に活用していたのである。彼の時代認識と、主知主義の科学的精神に彼が何を見ていたのかを次の引用からうかがい知ることができる。

現代が混沌としているというのは、言い換えれば、現代が依拠し得る伝統と信念を失ったということである。この失われた伝統と信念に取って代わるような伝統と信念を探索し模索する精神が即ち不安と焦燥を特徴とする現代精神である。そして現代人はその物々しい代用物を科学の中で求めようとする。／果たして科学が次の時代の人類を統制するほどの人生観を提供してくれるかということについては、疑惑がないわけではない。現代精神の悲劇的一面はここから生まれたと考えられる。しかしともかく、現代精神が科学に絶対的な期待をかけていることだけは事実である。したがって我々が現代の批評理論の中で多くの科学の援用を目睹するのは当然といわなければならない（「批評と科学」(1934)、崔載瑞 2015: 97)。

ここでは伝統と信念を失った現代の状況と、そのような現代精神を救済するために、主知主義の普遍的科学精神に寄せていた期待の内実がよく表れている。「科学が次の時代の人類を統制するほどの人生観を提供してくれるか」については疑惑を抱いているが、それはともかく「現代精神が科学に絶対的な期待をかけていることだけは事実である」というのである。主知主義文学者が樹立しようとする新しい伝統というのは、「科学的絶対的態度と、幾何学的芸術及び古典主義的文学」であるが、このような伝統も決して新しいものではなく、「ただ古い伝統を破壊した現代人が、自らの新しい伝統を発見または建設するまで、便宜的に彼らの欲求に比較的適合する古い伝統に間を借りるようなものである」（崔載瑞 2015: 74）。

そもそも文芸論をもって新しい人生観を明示的に提示することに対しては、崔載瑞は懐疑的な態度を取っていた。そして、新しい人生観を提示することの不可能性という、その「現代精神の悲劇的一面」にこそ、崔載瑞の初期批評の核心があると思われるのである。「文学や芸術には新しい精神を指し示す表現上の変化が目につくが、態度そのものはいつも無意識的である。したがって次の世代の人生観を定義するのは事実上不可能である」（崔載瑞 2015: 78-79）というのが崔載瑞の基

本的な態度である。そしてこのような態度から、反人間主義、反ロマン主義、延いては「秩序の文学観」（イサンオク 2010: 351）として理解されてきた崔載瑞の批評的立場が理解され得るのである。

崔載瑞は、個人の無限の可能性を認めるロマン主義の立場に明確な反対の態度を取り、「伝統」と「組織化」から人間の価値が期待できるとするヒュームの立場に賛同する。「有限な人間が何を思考し何を行うかに関わらず、それは結局有限なものである。したがって無限に対する人間の欲求も、食欲や性欲と同じく極めて固定的なものである」（崔載瑞 2015: 82）とし、人間がもつ無限の欲求の噴出から芸術の価値を求めるロマン主義に反対する。崔載瑞によれば、エリオットにおいても、芸術作品の価値は伝統という客観的基準によって可能になるのであり、「個々の作品を統制して判断するこの主知的企図」は、「外部的権威を極力排斥し、ひたすら『内部の音声』にだけ服従する浪漫派」（崔載瑞 2015: 92）からは距離を取る。ここで、エリオットの伝統の概念は有機的な秩序を意味しており、崔載瑞の「秩序の文学観」もエリオットの伝統概念の延長線上にある。

彼〔エリオット〕が文学伝統をいうとき、彼は決して個々の作品の総和を指しているのではなく、有機的全体として、組織体としての一国の文学または世界文学を指している。独自の作品と独自の芸術家の作品は、この組織体と関係することによって初めて意義をもつ。したがって芸術家は外部に忠誠を誓う義務がある（「現代主知主義文学理論」(1934)、崔載瑞 2015: 90）。

## (2) 「個性の滅却」——「秩序の文学観」の隠された契機

「芸術家は外部に忠誠を誓う義務がある」という文面から、後の『国民文学』時期における日本国家主義への追従を連想するのは容易である。この外部の普遍性を日本国家主義から見つけ出したという論理は、先行研究の検討からすでに指摘した通りである。しかし筆者は、個性の価値、または芸術作品の価値を、普遍的秩序から規定する

「秩序の文学観」には、「個性減却」という不可分の契機が隠されていたと考えている。崔載瑞が重んじる秩序というのは、外部的に与えられた伝統や歴史を指していたのではなかったのである。

この点は、秩序の概念を中心に崔載瑞を分析した先行研究（三原 2010、イサンオク 2010）からも確認することができる。ここでは、日本における代表的な崔載瑞研究である三原による一連の研究を参照したいが、三原（2010: 92）は、「外在的なドグマの誘惑を拒否して、内在的にドグマを生成し、しかしそれを決して固定しないために、『批評的精神』によってそれを絶え間なく壊していく。この動的なドグマ観こそ、崔載瑞が英文学研究を通じて得た最大な、また最も根源的な批評的『態度』ではなかったのか」と述べる。つまり、崔載瑞の秩序は、主体が追従する外部的な所与ではなく、主体と有機的な全体を成しているものであり、固定された独断的なドグマを拒否するための批評的精神の源泉になるようなものであったのだ。

三原によると、崔載瑞の「秩序の文学観」における主体化の契機は、後の「転向」においても変わらない崔載瑞の批評の根本的な性格である。つまり「筆者は、このような[崔載瑞の]『転向』・『再転向』のプロセスの中で、『理論に対する意志』と呼び得るものが終始存在したと考える。その『理論』というのは、一言でいえば『Order』[秩序]を絶対的価値にした『主体化』の理論である」（三原 2010: 125）というのである。このような三原の観点は後続する研究においても核心的な位置を占めており、「外在的なドグマにより普遍性を僭称するプロレタリア文学理論や民族文学理論の（似非）普遍主義を批判し、あくまで主知的・批評的な「個」に立脚しつつ、内在的に普遍的『基準』を構築し、その基準に従って『個』の『主体化』を測る理論である」（三原 2011a: 111）と、崔載瑞の批評の性格を具体化している。

筆者は、崔載瑞の「秩序の文学観」が結局植民地の知識人が自らの主体的な立場を確立するための実存的な模索であったという点では、三原と意見を一緒にする。ただ三原の研究は、崔載瑞の秩序の観念に焦点を当てて、その主体化の論理を論じているが、本稿では、秩序への追求の裏面で働

いている「個性減却」の契機により注目する。無論「秩序の文学観」は、「個性減却」を支えている基盤として、崔載瑞の思想において本質的な契機である。しかし、秩序への限りない憧憬が可能にした「個性減却」というラジカルな主体化の契機に焦点を絞ることによって、後の熱烈な皇道主義までつながる崔載瑞の行跡が、その内的な論理において理解され得ると思うのである。

「秩序の文学観」と「個性減却」の契機がその関係性において捉えられるのであれば、崔載瑞が理論の問題としてこだわっていたのは、秩序そのものであったというより、秩序と個人の位置関係とも言い得るものであったことになるだろう。「古典的芸術作品は、内面的浪漫主義に対する秩序と基準の勝利を語っている。そして、征服される内部の反乱が猛烈であればあるほど、生まれてくる作品は美しいであろう」（崔載瑞 2015: 103）。つまり崔載瑞が価値を求めていたところは秩序そのものではなく、「秩序と基準の勝利」の瞬間、逆の方向からいえば「征服される内部の反乱」の激しさにあった<sup>(2)</sup>。それはむしろロマン主義の復権とも思われる。ただ通常理解されているロマン主義と違うのは、崔載瑞は「内部の反乱」の勝利を謳歌しているのではなく、その必然的な失敗、征服されるべきその運命において芸術作品の美しさを認めているということである。それは秩序の必然的な勝利を語っていることからすれば、確かに主知主義的な立場ではあるが、崔載瑞が究極的な関心を示していたのは、その秩序に犠牲される個人の方であったのではないだろうか。ここでは、崔載瑞が主知主義であるかロマン主義であるかの問題は、決定的な重要性をもたない<sup>(3)</sup>。そのことは崔載瑞自らが証言しているものでもある。

我々は文芸作品に対するとき、宜しく批評的カテゴリーに陥ることを警戒すべきである。／従来の批評は党派の争いに過ぎなかった。主観対客観、個人対社会、浪漫主義対古典主義…その他無数の対立概念が過去二百年の間絶え間なく繰り返されてきた（『批評と科学』（1934）、崔載瑞 2015: 110）。

文学に表れる浪漫的要素と古典的要素は、人間の生物学的対立からくる必然的表現であり、どれが真実なもので、どれが虚偽であるかを断定することはできない。真実はどれにも含まれているのであり、虚偽もどれにも含まれている（「批評と科学」（1934）、崔載瑞 2015: 111）。

崔載瑞が究極的に依拠していた命題は、エリオットからの次のような引用であったと思われる。つまり、「芸術家の発展とは、不断の自己犠牲、不断の個性滅却である」（崔載瑞 2015: 88）というのがそれである。崔載瑞はこれを「実に二十世紀文学の革命的宣言である」と評しているが、彼のいう普遍的秩序というのも、「不断の個性滅却」を可能にする理論的土台のようなものであり、一つの普遍的理念として提起され得るものではない。主知主義かロマン主義かの区別よりも、「不断の個性滅却」を強要する運命的で必然的な普遍的包摂的な働きを理論化しようとしたことに、崔載瑞の初期批評の核心が存する。崔載瑞が信頼していたのは既存の西欧的な価値体系などではない。崔載瑞が普遍的科学精神を信頼するような表面的な態度を取ったのは事実であり、朝鮮最高のエリートとして教養や知識の重要性を説いたのも事実である。しかし彼が芸術創作や生活において要求した態度は、主知主義的な態度とは程遠い。それは、「批評と科学」の結論からも明らかである。

この態度というものは、まず功利的な目的を建てた後、自意識的に構成される態度であってはならない。それは社会生活、または社会心理の無意識的な、底から必然的な力を持って湧き出てくるものでなければならない。詩は、修身教科書や宣伝文書ではないのだ（「批評と科学」（1934）、崔載瑞 2015: 120）。

彼は、普遍的秩序に至る方向を理念的に提示することには一貫して反対していた。個人に対して、そのような普遍的秩序がただ強要されることになる場合、それは党派的な争い、または理念的なカテゴリーの圧制を意味するだけである。崔載瑞のいう普遍的秩序は、常に無意識的な態度として提

示され得るに止まる。

ここで、普遍と個性の関係が単純な従属の関係ではないということが分かるが、「現代批評におけるの個性の問題」（1936.4）において崔載瑞は、「今日の批評は浪漫主義的個性の批判または脱却に止まらず、進んで、新しい個性概念の建設に向かっている」（崔載瑞 2015: 51）といい、個性の問題をより深く掘り下げている。まず崔載瑞は、「芸術家が完全であればあるほど、その芸術家の中で、体験する人間と創作する精神を、より完全に分離するはずである。そしてそれだけより完全に、精神は、その素材である熱情を消化し変質するであろう」（崔載瑞 2015: 57）というエリオットの言葉を引用する。ここでは伝統的秩序の中でしか価値をもたない「創作する精神」と、そのような伝統による価値づけにもかかわらず依然として残る「体験する人間」を概念的に区分している（崔載瑞 2015: 58）。エリオットは、詩の素材になる固有の体験をもつ人間を認めると同時に、詩の客観的価値も擁護しようとしたのである。

崔載瑞は、エリオットの概念操作について次のように述べる。「このようにエリオットは、伝統的秩序に至ることを妨げる個性を厳しく非難したが、しかし詩の素材になる個性の存在をどうしても認めざるを得なかった。ここでエリオットは困ったジレンマに陥ったのである」（崔載瑞 2015: 58）。崔載瑞はこのジレンマを解決するためには、「詩人の個性的差異によって左右されない何かを設定」（崔載瑞 2015: 59）する必要があるという。

それなら、伝統によって価値づけられない、しかも個性的差異にも左右されない真空の個人は如何に表象され得るのか。ここで崔載瑞は、酸素と二酸化硫黄の化学反応の触媒であるプラチナの例をもってきて、詩人の個性をこのプラチナに喩えている。「もしこの個性がなければ詩的化合は全く行われぬ」のであり、また「この個性はできるだけ中性的」である必要があり、「中性的であるため個性自体は化合によって少しも影響を受けない」、言い換えれば「化合物の中に個性自体の要素は少しも含まれていない」（崔載瑞 2015: 60）という。化学反応の全過程を引き起こすが、その化合物には自らを少しも残さないプラチナをもつ

て、崔載瑞は「個性の滅却」を表象しようとしたのである。

芸術における個性の問題は、ただ批評理論的な次元での話ではなく、崔載瑞自身の実践的な問題とも深く関わっていたことは重要である。彼が、文学論を説きながら人生論めいた話をところどころ挿入しているのは、この二つが別個のものではないことを意味する。そのことを、彼のエッセイ風の文章「現代的知性に関して」(1937.5)で確認することができる。

そこで崔載瑞は、「文学は（したがって批評は）、『国民か？階級か？』という強迫状を送られた。そして右と左から即答を強要されている。それが今日世界の文学の身の上である」（崔載瑞 2015: 123）といい、理念的な争いに振り回される風潮を批判的に捉えている。「現代の学者たちは国民的情熱の奴隷になってしまった」（崔載瑞 2015: 125）という批判的な言及からは、『国民文学』期の崔載瑞の国家主義的な志向をまったく読み取れない。ここで彼は、個人の外部に実在的に存在するあらゆる価値を拒否しているようにみえる。彼は個人の内部的可能性に心酔するロマンティシズムに反対したが、彼のいう普遍的価値とは、個人の外部で発見し、選択し得るようなものではなかった。崔載瑞は、ビジネスマンに代表される機械的行動と、蕩児に代表される衝動的行動は、思索を経過していない点では一致しており、「これが現代人に許された行動圏のすべてである」（崔載瑞 2015: 131）という。そして、自らの実践的態度を「非行動的行動」（崔載瑞 2015: 133）と名づけている。

次に、化学反応の全過程を引き起こすが、それ自らは変化しないプラチナのイメージとも重なる「非行動的行動」の態度が、批評実践においてはどのような風を表れていたかを検討するために、朝鮮批評史の記念碑的な作品「リアリズムの拡大と深化—〈川辺風景〉と〈つばさ〉に関して」(1936.10.11)に話題を移してみよう。

### (3) 「リアリズムの拡大と深化」——批評実践における「個性滅却」の思想

英米批評の理論的武装の下に、朝鮮生まれの作

品の批評を試みた「リアリズムの拡大と深化」によって、「1930年代韓国批評は、いわゆる近代的批評の風貌を整えた」（金允植 2009: 41）といわれるように、「リアリズムの拡大と深化」の批評界における存在感は大きいものであった。この評論は、1930年代朝鮮のモダニズム傾向を代表する二つの作品、朴泰遠の「川辺風景」（1936.8.9, 10）と李箱の「つばさ」（1936.9）を取り上げている。

朴泰遠と李箱が同人として活動していた九人会（1933年結成）は、階級文学に対抗して芸術の独自性を擁護し、新しい感覚や技巧を重視した。朴泰遠の「川辺風景」は、京城の中心を流れる清溪川の川辺に住む30名ほどの住民の日常をイラストレーション形式で描写した作品であり、李箱の「つばさ」は、無力な一人の男の自閉的な意識を描いた作品で、表現上の革新で当時の朝鮮文壇に新鮮な衝撃を与えた同時に、数多くの批判を呼び起こした。崔載瑞はそれらがただ「即興的な創作ではなく、長い間作者の琢磨を経たような作品」であるといい、朝鮮文壇における同作品の登場を嬉しく受け入れている。両作品に対する崔載瑞の基本的な立場は次のようなものである。

その二つの作品は、その取材においてまるで違う。〈川辺風景〉は都会の一角で動いている世態人情を描いており、〈つばさ〉は高度に知識化されたソフィストの主観世界を描いた。しかし観察の態度及び描写の手法において、この二つの作品は共通の特色をもっている。即ち、彼らはできるだけ主観を離れて対象を見ようとした。その結果として、朴氏は客観的態度で客観を見、李氏は客観的態度で主観を見たのである。これは現代世界文学の二つの傾向—リアリズムの拡大とリアリズムの深化を、或る程度まで代表するものであり、我々に大変に興味ある問題を提供してくれる（崔載瑞 2015: 199）。

「川辺風景」と「つばさ」を評するに当たって、崔載瑞の論旨の核心は、「小説家が芸術家である以上、彼において主観世界と客観世界の間に、価値の優劣はない」（崔載瑞 2015: 200）のであり、

したがって「芸術のリアリティーは、外部世界もしくは内部世界にだけ限られているのではない。そのどちらにおいても、客観的態度で観察することからリアリティーは生じてくる」（崔載瑞 2015: 201）ということである。要するに、「問題は材料にあるのではなく、材料を見る眼にある」（崔載瑞 2015: 201）ということである。ここで崔載瑞は、芸術家はできるだけ「カメラ的存在」であるべきだと述べている。世界を映すカメラの譬喩は、世界に対する態度を理念的な物差しで測るのではなく、自意識的な構築以前の次元に求める崔載瑞の立場と相通じる。世界のすべてを映すがそれ自体は自覚されないカメラの機能は、「プラチナ」や「非行動的行動」の観念とも重なっているといえよう。

1930年代の朝鮮文壇において社会主義批評家の専有物と見なされていたリアリズムの概念をもって、モダニズム小説にリアリズムの拡大と深化を説いた崔載瑞の立論が、多くの社会主義批評家からの反論を呼び起こしたのは当然であろう。KAPFが解散された（1935）とはいえ、左派文学の朝鮮文壇での影響力はまだ存続していた。彼らの観点からすれば、「川辺風景」や「つばさ」は、現実の総体性を形象化することに失敗し、技巧だけを重んじる没理念の文学に過ぎなかった。例えば林和においては、「川辺風景」と「つばさ」は、世界に対する歴史的な認識の欠如を表す小説創作における事例に過ぎなかった（『写実主義の再認識』『東亜日報』、1937.10）。崔載瑞のいう普遍的秩序は、歴史的必然性の理念とは相容れないものであったので、社会主義批評家との衝突は十分に予期されたものであったといえるが、「センチメンタル論」（1937.10）などでいわれているように、彼において社会主義は一種のセンチメンタリストの態度でしかなかったのである（崔載瑞 2015: 173）。

しかし崔載瑞は、カメラの機能を成功的に果たした「川辺風景」と「つばさ」を高く評価しながらも、また「小説家はカメラであると同時に、このカメラを操る監督であり得る」（崔載瑞 2015: 202）といい、「川辺風景」と「つばさ」の作者は、「描写のすべてのディテール（細部）を貫いていく統一的な意識」（崔載瑞 2015: 205）、または批評

の標準になる「モラル」（崔載瑞 2015: 215）が不在していると批判する。意識的な理念を排除した作者のカメラの機能を重視しながらも、またカメラの監督としての統一的な原理を要請するのは、一見矛盾しているようにみえる。朴商準（2018: 182）は、ここで崔載瑞の論理が自家撞着に陥ったと指摘する。しかし、ここで崔載瑞がいうカメラ監督の統一的意識は、例えば林和がいつているような歴史的必然性の理念ではなく、むしろ無意識的な態度に表れる普遍的秩序のことであると考えるべきである。歴史の方向を指導する普遍的秩序が、明示的で意識的に主張され得るものではないということは、後の『国民文学』期までつながる彼の揺らがない立場である。そして、そのような無意識的な普遍秩序における「個性の滅却」こそが、崔載瑞の一貫した思想的態度だと思われるのである。

筆者は、主知主義、国民文学、皇道主義の様々な意匠の下で一貫していたこの思想の核心を掴めない限り、崔載瑞の熱烈な皇道文学の実践は理解されないと考えている。次節では、この「個性滅却」の思想が、1940年代という時代状況の中で、どのように展開していったのかについて検討してみたい。

## 2. 死への可能性としての「個性滅却」—崔載瑞の皇道主義が意味したもの

### (1) 『国民文学』の創刊

日中戦争が深化していく中で「東亜新秩序」の新たな理念が唱えられ、それによって多くの朝鮮の知識人は「転向」を行った。武漢の陥落（1938年10月）、パリ陥落（1940年6月）と続く一連の戦況の変化を受けて、朝鮮国内の知識人には民族の解放が実質的に難しい目標とみえたのであり、新たに提起された「東亜新秩序」の理念の下で朝鮮の行くべき道を模索したのである。それは、朝鮮最高のエリートであった崔載瑞も例外ではなかった。

この時期には、朝鮮の内部で「東亜協同体論」（第2次近衛声明に呼応して三木清など昭和研究会に参加していた左派知識人が提唱した「東亜新



秩序」の一構想)や「内鮮一体論」をめぐる議論が活発になっていく。出版界に対する総督府の介入が強化されていき、「内鮮一体」の路線に従う『東洋之光』(1939年1月)、『国民新報』(1939年4月)などが創刊される中、崔載瑞が編集者としてつとめる『人文評論』(1939年10月)が創刊される。林和、兪鎮午、白鉄、金起林、金南天、徐寅植、朴致祐など左右の論客を網羅した筆者陣からも、崔載瑞の力量がうかがわれるが、『人文評論』創刊号の巻頭論文である徐寅植の「文化における全体と個人」(1939.10)や朴致祐の「東亜協同体論の一省察」(1940.7)などからも、「東亜新秩序」の新たな構想に関わっていこうとする『人文評論』の政治的スタンスを読み取ることができる。

その『人文評論』も当局によって廃刊され、『人文評論』、『文章』などを統廃合し、「半島唯一の文化雑記」として誕生したのが、『国民文学』(1940年10月)である。崔載瑞は、この『国民文学』の編集主幹として核心的な役割を果たしたが、後に『国民文学』での活動を総括した『転換期の朝鮮文学』(1943)の「まへがき」において、自らを朝鮮文学の転換期における「梃子」と見なしたのも、十分な根拠があることである。

この四五年間、私は朝鮮文壇の激しい転換をば身を以て体験せねばならなかつた。殊に雑誌「国民文学」が発刊されてからは、私はその小さい梃子とならねばならなかつた(「まへがき」、崔載瑞 1943: 4)。

## (2) 崔載瑞における2回の「転向」

しかし、当時の朝鮮の知識人において広範な現象とされる「転向」と、崔載瑞のその後の行跡を並べてみると、「転向」という一般的現象としては片づけられない何かを感じる。そのことに最も敏感だったのは金允植だった。それは崔載瑞が創作に乗り出し、自ら皇道文学の実践を行ったことに関係している。「なぜ評論家である崔載瑞が小説まで書かなければならなかつたのか。評論では到底堪えられない何がそこにあったが故に、作家でもない彼が小説に手を出さなければならな

かつたのか。この問いほど決定的なものは、後期崔載瑞において他に存在しない。……朝鮮人徴兵制度がそれである」(金允植 2009: 39)。崔載瑞のデビュー作「報道演習班」(1943.7)が朝鮮人徴兵制を題材にしていることから、彼の創作が徴兵制から刺激されたのは明らかである。

日本が朝鮮人徴兵制を閣議で決議したのは、1942年5月9日のことである。朝鮮人徴兵制が公表されたこの時期を境目に、崔載瑞の心境に何の変化があったのかについて、より注目して見る必要がある。そうすることによって初めて、朝鮮人徴兵制が彼に何を意味していたのか、延いては彼において対日協力や「内鮮一体」の思想が何を意味していたのかが明確にみえてくると思われるからである。

崔載瑞のこの変化がもつ決定的な意味を指摘した先行研究は、筆者が確認した限り金允植(2009)の研究が唯一である。金允植は、崔載瑞の転向が2回あったと指摘し、『国民文学』創刊による第1の転向において彼はより積極的な国家主義的な態度を取り始め、朝鮮人徴兵制による第2の転向によって創作の道に進んだと述べている(金允植 2009: 40-46)。しかし、第1の転向では説明し切れない何かを指摘しながらも、創作開始の契機になったということ以外、第2の転向が崔載瑞の思想においてもつ意味については論究していない。以下では、その意味を明らかにしていきたい。そうすることによって、崔載瑞初期批評の核心であった「個性滅却」の思想との関連において、彼の「親日」の行跡が何を意味していたのかが明らかになると思う。

第2の転向以前の崔載瑞の言説は、「東亜新秩序」の下で朝鮮の行くべき道を模索しようとした他の朝鮮の知識人と基本的な認識を共有しながらも、国家への強い志向性にその特徴がある。『転換期の朝鮮文学』に収められている文章の中で時期的に一番早い「新体制と文学」(1940.11)には、「この事変(日中戦争—引用者)が世界史的な意義を持つ」(崔載瑞 1943: 29)ということや、「自由主義の文学的解釈である処の個性穿鑿乃至は個性表現と云ふことも往時のやうな積極的な意味は持たなくなつてをります」(崔載瑞 1943: 36)とい

うことなど、その当時に一般的に広がっていた認識がみられる。そのような認識に基づいて、最終的に「新体制が我々に要求する」のは「国民意識」（崔載瑞 1943: 40）だとする『国民文学』の立場がすでに表れている。それに続く「転換期の文化理論」（1941.2）では、「然らば国家は如何なる力に依り文化に斯くの如き統一を与えるのか？それは国家理想以外にはあり得ない」（崔載瑞 1943: 11）と主張し、その国家主義的な立場を明らかにしている。また「文学精神の転換」（1941.4）においても、「こゝまで考へて来るならば、現代文化が取るべき転換の方向は殆ど自明の事柄に属するではないか？文化の国民化—これ以外に途は無いであらう」（崔載瑞 1943: 23）と述べ、「文化の国民化」というスローガンを持ち出している。

しかしこの時期の崔載瑞は、「文化の国民化」をどのように果たすべきかの具体的な方法には触れておらず、抽象的なスローガンを唱えているだけである。崔載瑞のいう「国民」とはもちろん「日本国民」であるが、崔載瑞はその「日本国民」の中の朝鮮民族をどう処理すればいいかについて、苦戦を繰り返していた。それこそ、『国民文学』が成功するかしないかに関わる決定的な問題であったからである。崔載瑞がこの問題で如何に苦心していたのかは、『国民文学』創刊号に登場する座談会「朝鮮文学の再出発を語る」（『国民文学』1941年11月号：70-90）における辛島驍（京城帝国大学教授）とのやりとりからもうかがい知ることができる。ここで崔載瑞は、朝鮮作家は日本人であることに徹底すべきだとする辛島の発言に対して、「ローカルカラー」や「特殊性」に止まらない、「朝鮮文学の独創性」の観点を持ち出しているのである。この観点は、「朝鮮文学は九州文学や東北文学や乃至は台湾文学等が持つ地方的特殊性以上のものを持つ筈である」（崔載瑞 1943: 88）という、朝鮮の特殊性を日本の一つの下位カテゴリーとして捉えることに反対する形で表れている。

この「国民」＝「日本人」という等式、またその中の「朝鮮人」の位置という、崔載瑞がぶち当たった難問をどう解釈できるのか。例えば三原は、「自己を『解剖』する行為を通じて」（三原

2011a: 111）為された崔載瑞の主体化の試みは、結局「『普遍性』を詐称する『絶対者』に、最終的には帰依する運命」（三原 2011a: 118）であったという、その政治的な失敗の運命を指摘する。しかし後続する研究において三原は、崔載瑞の主体化の論理に、内地における国民主義的な言説に対する批判的な契機が存在し得るという可能性に注目し、「ここまで『彼自身の主人』という矜持を持ち続けてきた崔載瑞が、それほど簡単に『国策宣伝』の一機関に甘んじて身を墮したと考えてよいのだろうか」（三原 2011b: 22）という問題提起を行う。三原は「当然視されている「国民」＝「日本人」の等号に斜線を引くこと—「朝鮮人」の独立した主体を放棄する代わりに「日本人」の主体にも変容をせまり」（三原 2011b: 27）得るような、批判的契機を読み取る。しかし三原自らが指摘しているように、このような解釈はあくまでも事後的な解釈であり、「たとえそのようなポストコロニアル理論的空想を弄ぶことが今日の時点では可能であるとしても、当時の歴史的現実、極度に暴力化・硬直化したコロナル状況であったことを忘れるわけにはいかない」（三原 2011b: 27）と指摘する。実際、そのようなポストコロナリズムの戦略を、崔載瑞が意識的に駆使していたとは到底見なし難い。

本稿で注目するのも、彼が皇道主義に至ったその経緯を、その内在的な論理に即して究明しようとするのであった。そのためには何よりも、朝鮮人徴兵制による第2の転向に注目してみる必要がある。

1942年5月9日、朝鮮人徴兵制が閣議で決議される。崔載瑞は早速「徴兵制実施の文化史的意義」（1942.5）を書いて、その感激を次のように語っている。「去る五月八日閣議に於て決定を見たる朝鮮に於ける徴兵制実施の件は、それが我々多年の待望であつたと同時に、その発表が何人も想像し得ざりし時期に於てなされたゞけに感激一入なるものがある。このことが持つ意義は深遠無量にして遽に汲み尽し得ない」（崔載瑞 1943: 199）。ここで崔載瑞は、「国民化」の方法をついに見つけたかのように、次のようにも語っている。「国民的情熱と云ふものは説得や勧誘や、況してや命令

や号令に依つて生ずるものではない。祖国のために自ら血を流し生命を捨て、闘ふ所から国民的な情熱は油然と湧き出るのである」(崔載瑞 1943: 202)。

その前までは、国民の形成における朝鮮の位置に悩んでいた崔載瑞であったが、徴兵制の公表後には全体的に自信をもった論調になっていることが目立つ。「朝鮮文学の現段階」(1942.8)においては、その自信の表れとして、日本と朝鮮のある逆転現象が起こっている。「朝鮮文学の革新は新体制以来のことで、決してその歴史が古いとは云へない。にも拘らずその革新振りには真に目醒しきものがあつて、さう云ふ点では内地の文壇よりも一歩先んじてゐると云はれるも強ち無理ではないと思ふ」(崔載瑞 1943: 81)。ついに「文学者と世界観の問題」(1942.9)において、「人類一般に通ずる普遍妥当なる世界観と云ふが如きものはも早や真の意味に於ける世界観でなく、……されば今日以後人類は斯くの如き抽象的な世界観の代りに、各自特定なる国民的世界観を把持すべきである。……そこで日本の世界観は先づ第一に天皇に対する絶対帰依の表現でなければならぬことが明かである。……天皇は価値の根源体として臣民の一人一人に価値を分与し給ひ、彼の生命をして価値あらしめ給ふのである」(崔載瑞 1943: 112-113)という認識に至り、皇道主義への傾斜が明らかになる。

またそのような皇道主義の裏付けとして、彼の「秩序の文学観」を再び呼び出している。「又個人は価値を創造する力を持ちません。彼はたゞ生活全一体の分枝たることに依つて、与へられた価値を実現する能因者たるに過ぎないのであります。だから彼は全一体の一員になり切ることによつて、国家の一員になり切ることによつて彼に与へられたる価値を発揮し得るのみであります」(崔載瑞 1943: 126)。普遍的秩序における「個性滅却」の思想が、戦争末期の時局において、再びその姿を現していたのである。

「国民文学の要件」(1943.10)では、国民意識を論じる文脈の中で、無意識的秩序という彼の基本的な考え方も確認することができる。「理想的に云へば作家は国民意識を意識しないまでに意識

化してゐなくてはならない。その中で生きその中で考へるのでなければ、作家は国民的な何物をも書き得ぬであらう」(崔載瑞 1943: 57)。

既存の先行研究の多くは 1940 年代崔載瑞の言説を一枚岩のように扱っているが、以上の検討から、この時期の崔載瑞の立場は、微妙な形ではあるが目まぐるしく変化していたことを確認できたと思う。

### (3) 「内鮮一体」に対する崔載瑞の立場

「文化の国民化」というスローガンからも分かるように、崔載瑞は文芸批評という文化の領域において「内鮮一体」の理念を実現させようとした。第 2 の転向前の崔載瑞は、「国民」の理念の下で朝鮮の特殊性を位置づけることに苦心したが、それが理論的に成功していたと言ひ難い。しかし、日本の一部分に収まらない朝鮮の特殊性へのこだわりからは、転向社会主義者や完全一体論者とは区別される理論的方向を読み取ることができる。

「多民族国家体制のなかで朝鮮民族の『独自性』を守ろうとした転向社会主義者の論理は、一種の『自治論』に近いものであった」(洪宗郁 2011: 84)といわれるように、転向社会主義者の議論の多くは、政治的平等、経済的自立に向けられていた。当時朝鮮の「内鮮一体論」は、「協和的内鮮一体論」と「徹底一体論」(玄永燮による区分)、または「平行提携論」と「同化一体論」(緑旗連盟による区分)などに区分されて理解されていた。転向社会主義者たちの「内鮮一体論」は、玄永燮などによる「徹底一体論」が主張する「精神的内鮮一体論」の観念的要素を批判して、政治、経済に関わる現実的な問題として「内鮮一体」を捉えようとした<sup>(4)</sup>。

崔載瑞は、「内鮮一体」を政治的経済的な問題に還元しようとする転向社会主義者の議論からは次第に離れていき、戦争末期になるにつれて「徹底一体論」の立場に近づいていくが、朝鮮の特殊性を理解する上では、彼独自の観点を諦めることはなかった。それは何よりも彼の実存に関わる問題であったのであり、彼の本道である文学論との関係において解決されるべき問題であった。そこで彼は、普遍的秩序における「個性の滅却」とい

う彼の根本思想に立ち戻るしかなかった。そして朝鮮人徴兵制の決議は、皇道という普遍的秩序において命を捧げる「個性滅却」の決定的な契機であったのである。

崔載瑞において、普遍的秩序は理念のカテゴリなどではないということは、すでに述べた通りである。崔載瑞の意図は、まず政治的経済的秩序の中で朝鮮の特殊性を位置づけようとするものではなかった。その点で転向社会主義者たちとは、その問題関心を異にしている。例えば、代表的な転向社会主義者の一人である印貞植は、「東亜の再編成と朝鮮人」(1939)において、日中戦争の進展による朝鮮の兵站基地化によって、「重工業、特に軍需工業が急激に発展することによって、朝鮮社会の内部的矛盾が緩和される」(印貞植 2017: 88) ことを展望していた。しかし崔載瑞において、そのような模索の方向は、彼の悩みを解決してくれるものではまったくなかった。

半島人は如何にすれば大東亜共栄圏の建設に直接参与し得るのであるか? 生産拡充もあり、労務提供もあり、献金もあり、貯蓄もある。勿論夫等の一つ一つが十分に意義を持った御奉公であることは間違が無い。然しそれだけで果して大東亜共栄圏の建設と云へるであらうか? かうした懸念は心ある半島人の頭を掠める影であつたのである。従つて又如何にすれば半島人は真に皇国臣民となり得るのかと云ふ疑問も出て来た訳である。／これら諸々の不安や疑念に対して端的明快な解答を与へたものはこの度の徴兵制の発表である (『徴兵制実施の文化史的意義』、崔載瑞 1943: 206)。

時局下半島人の励むべき途としては皇国臣民としての自己錬成もあつたであらう。又生産拡充や物資節約、貯蓄、献金等もあつたであらう。何れも銃後国民の務として重要ならざるは無い。然しそれは飽くまでも銃後の務であるが故に、身を以て祖国を守り、進んでは大東亜の建設に直接参与すると云ふことは自づと別なのである。……有体に云へば戦線へ出てゆくと云ふことが結局根本であつて種々な国民運動はそこから派

生して来る枝葉ではなからうか (『徴兵制実施と知識階級』、崔載瑞 1943: 209-210)。

戦線に赴いて皇国臣民として死と対面するのが本質的な問題であり、それ以外の政治的経済的位置の確保などは、枝葉的な問題に過ぎないというのである。延いては、死との対面は、あらゆる思想の操作をも超越する絶対的な問題であった。

然し思想運動だけでは祖国観念は生れないのではないか。いざと云ふ場合には自分の血を流す、否最愛の子供の命までも献げると云ふ所で、初めて本当に祖国観念は生れて来ると思ふ。自己と国家とが血を以てつながる (『徴兵制実施と知識階級』、崔載瑞 1943: 214)。

以上のような検討を踏まえれば、先行研究がポストモダン理論を援用して行った崔載瑞に対する批判は、崔載瑞に対する内在的な理解を示しているとは見なし難い。『国民文学』は日本帝国主義の植民地支配欲望と、〈朝鮮=日本〉という等式の内面化を根拠に、自らを世界史の普遍的位置に高めようとする植民地知識人の欲望の共謀関係という性格を帯びている。もちろんこの欲望が徹底した誤認の構造によって作動していた事実もまた指摘されなければならない (ゴボンジュン 2008: 262) といった批判や、崔載瑞の朝鮮語の放棄に触れて、「しかし日本語の専有を通じて日本人になれるという『同化の夢』は実現不可能な夢に過ぎない。これは政治的な面だけみても確認可能である。朝鮮は日本の正式の領土になるにつれて住民たちには日本の国籍が賦与されたが、帝国議会の参政権は賦与されなかった。したがって対外的には『日本人』だったが国民統合上では『非日本人』の地位に止まった」(イマンヨン 2012: 467-468) という批判、また「国家 (日本) が普遍的価値の実体として見なされ、日本人が唯一価値のある文学的対象に見なされるのなら、国家 (日本) に所属されていない朝鮮人たちや個別主体は『不可能なものとしての実在』(ジジェク引用者) として残るしかない」(李真亨 2013: 260) という批判は、いずれも批判的な枠組みが先立っており、

崔載瑞の内在的な論理には踏み込んでいないと思われる。

#### (4) 「まつろふ文学」——「個性滅却」の完成としての皇道主義

崔載瑞において、「東亜新秩序」への協力は、単純に西欧的価値を超克するという意味をもったのではなく、絶対的普遍のために「滅却」することのできる条件を見つけたことを意味していた。そして「十六年十二月八日、畏くも宣戦の大詔を奉戴するに及んで世界観的な自覚を深め、最後に十七年五月の徴兵制実施発表に依つて、いよいよ自己の性格を最終的に決定したのである」（崔載瑞 1943: 4）。普遍のために死ぬことの可能性が開かれることによって、崔載瑞の悩みに究極的な解決の光が差し込む。「昨年十二月八日の朝、我々は畏くも宣戦の大詔を拝し、又去る五月八日朝鮮に徴兵制実施の発表を見たのである。我等国民はその瞬間真理の像なる日の神の御姿を拝して、心の暗雲一度に払拭されるの爽快さを覚えたのである」（崔載瑞 1943: 193）。崔載瑞は、朝鮮人と日本人が政治的に平等になり得ると考えてもいなかったのであり、また朝鮮人と日本人の本質的な違いを誤認したわけでもない。彼は誰よりもその違いに自覚的であった。そして彼は、死への可能性を媒介にして国民への完成を果たそうとした。ここでは、すべての経済的・政治的区分、延いては、民族という宿命的理念を含めたすべての理念的区分が消滅し、天皇という、意識の領域を超えた絶対的な普遍へ「滅却」していくことが可能になる。

崔載瑞の実存的な結論ともいえる「まつろふ文学」（1944）には、彼を長らく苦しめた問題が、率直な筆致で表現されている。

問題はいつも簡単明瞭であつた。一君は日本人になり切れる自信があるか？この質問は更に次のやうな疑問を起した。日本人とは何か？日本人となるためにはどうすればよいのか？日本人たるためには、朝鮮人たることをどう処理すればよいのか？（石田耕造（崔載瑞）、「まつろふ文学」『国民文学』1944年4月号：5）

朝鮮人と日本人の異質性に自覚的だった崔載瑞は、単純に美的観念に陶醉することで、その一体化が成し遂げられるとは考えていなかった。それは、彼が初期批評から堅持してきたロマン主義批判の延長でもあった。彼は最後までそのような安易な解決には与していない。

また崔載瑞はここで、「XX主義から、国家主義へ、斯くして生まれた」国民文学運動を、「抽象的であり、ひどく観念的なもの」（「まつろふ文学」：3）として批判している。そういった国家主義のあるものは、「その自覚は国体論と或る点に於て結び付いてゐた」点で、「抽象的なとは云へぬであろう。然しそれにしても、やはり理念的たるを免れ得なかつた」（「まつろふ文学」：4）。「日本人ならば何等の理論的操作を経ずにして体现し得るところのもの」（「まつろふ文学」：4）を、国体論に結び付けて国民化と語るのは、崔載瑞においてあまりにも安易な理念的操作に見えたはずである。それは自らの立場を忘却することでしかない。それでは「個性の滅却」たるものも不可能であろう。「『祖国観念』は甚だ厳肅な言葉であるが、又ひどくセンチメンタルな言葉でもある。朝鮮の文人達はこの言葉が持つセンチメンタルな響きに陶醉して、しばし自己を放棄したのではなかつたか？」（「まつろふ文学」：5）崔載瑞は、決して朝鮮人と日本人の違いを忘れようとはしない。「我々の向はねばならぬ目標の知性的理解と、云はゞ我々が現在あるところの感性的習慣との不一致乃至間隙」（「まつろふ文学」：4）を極限まで意識化しようとする。彼はこれを「敢えて煩悶と云ふ」（「まつろふ文学」：4）。

しかしやがて、「徴兵制の実施に依つて朝鮮の文人達がほつとした気持」になり、「それは兎も角諸々の疑問や煩悶に大きな終止符を打ち、更に明確なる目標と、それに向つて更に前進すべき自信とを与へるものだつた」（「まつろふ文学」：4）。政治的・経済的な違いはもちろん、民族という最後の理念をも消し得る死への可能性は、「大きな精神的革命」（「まつろふ文学」：5）を、朝鮮にもたらしたというのである。

「まつろふ文学」は、20年間の理論的模索を経て到達した、彼の知性の頂点であつたのである。

それを、一時期主知主義の信奉者であった彼が、皇道主義の美学の前で知性が働かなくなってしまう、それに盲目的に投身したというのは、説明としても納得がいかないだけでなく、崔載瑞の知性をあまりにも無視することになるのではないだろうか。そのような説明は崔載瑞という朝鮮最高の理論家を、その理論の内部から批判することをむしろ妨げることになるだろう<sup>(5)</sup>。崔載瑞の立場の変化には、転向の論理構造では包括できない思惟の形が存在する。崔載瑞の結論としての皇道主義は、理論的知性を放棄した産物ではなく、金允植の表現通り「理論への殉職」(金允植 2009: 62)といた方が、より正しいであろう。

### おわりに

本稿では、既存の民族主義的な、またはポストコロニアリズムの理論的枠組みでなされた先行研究では、十分に検討されてこなかった崔載瑞の思惟の形を、そのまま取り出そうと努めた。その結果、彼の批評の中心には「個性滅却」の思想が置かれており、それが後の皇道主義まで重要な役割を果たしていたことを指摘できた。

無論、「個性滅却」の思想の裏には、それを支えていた「秩序の文学観」があったのであり、秩序への憧憬は崔載瑞の晩年まで変わることはなかった。解放後書かれた『文学原論』「序文」の「解放後の自由の甘さを知ったが、また秩序の大切さに気づいた。日増しに混乱してくる環境の中で、私は秩序を慕う心が募った」(崔載瑞 1957: 1)という文面からもそれは明らかである。しかし解放後、自らの親日的な行跡について、一言も反省や解明の言葉を発せず、英文学の研究に一身を捧げたのは、その様態を変えたもう一つの「個性滅却」の現れではなかったのだろうか。秩序への憧憬に裏付けされた彼に理論的信念は、また彼の譲れない実存的態度でもあったのではないのか。

崔載瑞の初期批評から皇道主義への転向を経て、解放後政治的空間から離れて研究に専念する時期までの論理が、一貫したものとして理解されたからといって、彼に対する政治的な批判が無効になるわけでは、もちろんない。彼が抱えていた実存

的な問題が何であったかに関わらず、彼の『国民文学』の試みが全体主義的な国家政策に協力する形を取ったのは、明らかな事実である。

しかし、彼の内面的な論理を、そのままに理解する作業も重要である。なぜなら、当時朝鮮の知識人が抱えていた実存的な問題に対する理解なくしては、その全体主義的な協力の意味も、完全に究明し得ないと思われるからである。しかもそれが、戦前朝鮮の批評界において最も影響力が広く、またその学術の水準において最もレベルの高かった崔載瑞という人物であればなおさらである。本稿の試みも、当時の思想と政治的实践をより総合的に理解しようとする試みの一環として位置づけることができよう。

### 〈参考文献〉

#### 新聞

『国民文学』  
『東亜日報』

#### (日本語)

- 崔載瑞 1943. 『転換期の朝鮮文学』人文社。  
洪宗郁 2011. 『戦時期朝鮮の転向者たち』有志舎。  
三原芳秋 2011a. 「『国民文学』の問題」『JunCture 超域的日本文化研究』第2号、158-170ページ。  
——— 2011b. 「Metoikos たちの帝国 T. S エリオット、西田幾多郎、崔載瑞」『社会科学』第90号、1-42ページ。

#### (韓国語)

- 고봉준 [ゴボンジュン] 2008. 「전형기 비행의 논리와 국민문학론: 최재서 비평을 중심으로」『한국현대문학연구』第24号, pp. 245-273.  
권일경 [クォンイルギョン] 1996. 「1930년대 모더니즘 소설의 실제관과 재현개념에 관한 고찰: 최재서의 리얼리즘론과 내성소설을 중심으로」『관악어문연구』第21号, pp. 97-116.  
金允植 1984. 『한국 근대문학 사상 연구 1』 일지사.  
——— 2009. 『최재서의 『국민문학』과 사토 기요시 교수』 역락.  
金在湧 2004. 『협력과 저항』 소명출판.  
金哲 2005. 『'국민'이라는 노래』 삼인.  
三原芳秋 2010. 「최재서의 Order」(渡辺直紀ほか編 2010. 『전쟁하는 신민, 식민지의 국민문화』 소명출판.)  
朴商準 2018. 『1930년대 한국 모더니즘과 이상, 최재서』 소명출판.  
서준섭 [ソジュンソプ] 1993. 「문학과 지성: 1930년

대 최재서의 주지적 문학론 비판』『한국현대문학연구』 pp. 254-266.

尹大石 2006. 『식민지 국민문학론』 역락.

이만영 [イマンヨン] 2012. 「보편에 이르는 길: 최재서의 국민문학론 형성 과정을 중심으로」 『어문논집』 第 66 号, pp. 445-475.

이상옥 [イサン옥] 2010. 「최재서의 질서의 문학과 칠일과시즘」 『우리말글』 第 50 号, pp. 347-379.

이원동 [이원동] 2010. 「완전한 존재를 향한 불가능한 꿈: 최재서의 “국민문학” 담론의 심리구조」 『어문논총』 第 52 号, pp. 261-285.

李真亨 2013. 『1930년대 후반 식민지 조선의 소설 이론』 소명출판.

이혜진 [이혜진] 2010. 「신체제 시기 최재서의 ‘국민문학론」 『한국학』 第 33 号, pp. 259-287.

——— [이혜진] 2015. 「최재서 비평론의 연속과 단절」 『우리어문연구』 第 51 号, pp. 421-455.

印貞植 2017. 「東亞의 再編成과 朝鮮人」 (洪宗郁編 2017. 『식민지 지식인의 근대 초극론』 서울대학교출판문화원.)

林鍾国 2013. 『친일문학론』 민족문제연구소.

전설영 [전설영] 2010. 「식민지 말기 국민문학론의 국민 되기 논리와 문학적 의미: 최재서의 「받들어 모시는 문학」 을 중심으로」 『사이』 第 9 号, pp. 357-389.

鄭鍾賢 2011. 『동양론과 식민지 조선문학』 창비.

진정석 [진정석] 1997. 「최재서의 리얼리즘론 연구」 『한국학보』 第 23 号, pp. 184-201.

車承棋 2009. 『반근대적 상상력의 임계들』 푸른역사.

崔載瑞 1957. 『문학원론』 춘조사.

——— 2015. 『최재서 평론선집』 지식을 만드는 사람들.

(1) 洪宗郁によれば、植民地朝鮮の「轉向」と日本

国の「轉向」の間にはズレが存在する。そのズレにおいて、「内鮮一体論」が思想的な問題として浮上してくる。「植民地では社会主義思想を放棄しても、民族主義というもうひとつの思想あるいは思想以前の問題が問われざるをえなかった。そのため朝鮮の『轉向』は、いきおい『親日』の姿勢を強いられ、とくに日中戦争以降の戦時期には『内戦一体』の問題と結合しつつ、積極的な戦争協力にまで展開した」(洪宗郁 2011: 4-5)。「内鮮一体論をいかに受けとめるかは、朝鮮人の轉向においてもっとも決定的な問題であった。内鮮一体論の受容は、轉向への敷居であると同時に、轉向の論理の究極的帰結点でもあった」(洪宗郁 2011: 74)。

(2) 崔載瑞は「現代批評における個性の問題」(1936.4)においては、次のように述べている。「古典的作品は、その作家が、あくまでも彼がロマンティズムを抑制し得たという意味においてだけ、強く美しくなり得る」(崔載瑞 2015: 69)。

(3) 金允植(1984)は崔載瑞を根本的なロマン主義者であると規定した。その詳しい論証は行われていないが、主知主義理論家としての崔載瑞像に異議を提起したことに意味があると思われる。

(4) 以上二つの「内鮮一体論」についての詳細な議論は、洪宗郁(2011: 74-87)を参照。

(5) このことは、民族主義的文学史の解体がまだ至難な作業であることを意味する。1940年代崔載瑞の「皇道文学」を彼の知性の頂点とみる本稿の観点は、その解体のための一つの切口になり得ると思われる。「1930年代の近代性を高評するが1940年代初以後韓国文学史の展開と絶縁して考察する態度と、1940年代以後を暗黒期として封印する認識は、暗々裏に解放後『国文学』制度を強固に維持する機能を果たしてきた」(鄭鍾賢 2011: 20)。